



重は二五、六^口。「世話が大変だろう」。安楽死を勧める人もいた。

「どうする……」。子どもら家族四人で話し合っていたら、ペロが悲しそうにみんなを見つめた。「顔付

一時は「安楽死」の話も

きが変わったんです。私たちがの声や表情から分かるんですよ」と妻の利子さん(四二)。安楽死には高二の娘が強く反対した。

家族の依頼で、獣医が大坂の業者から特製車いすを取り寄せてくれた。いつもは玄関にじゅうたんを敷いてもらい、紙おむつをして、寝そべっているが、一日三回の散歩が何よりの薬は「えらいねえ」「これか

らも、かわいがってあげてね」と声がかかる。夜は八時から近所まで。

雨の日以外は毎日、同じコースを歩く。もう、一年になる。

散歩姿に観光客も拍手



近くの玉津島神社の遠北明彦(あちきた・はるひこ)宮司は「飼い主の温かい気持ちがイヌにも伝わるんですね。主人に遅れたらいかと一生懸命歩いている。生きることの大切さを教えてくれているようです」。

波に戯れながら走り回る車いすのペロと和歌山市和歌の浦の片男波海水浴場で